

甲子園

50年戦記

高校野球の勢力図は
なぜ塗り変わるのか？

大島裕史

金属バット が甲子園を変えた



東海大相模・原辰徳の登場から新時代の慶応、
京都国際まで。記憶に残る名勝負とともに振り返る。

2024
4
2024

甲子園50年戦記

高校野球の勢力図はなぜ塗り変わるのか？

大島裕史

星海社

329



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに　　〜第106回の夏

2024年は、地方大会が始まる前から猛烈な暑さであった。そして8月23日、阪神甲子園球場では、初の全国制覇をかけて京都国際と関東第一が戦った。9回を終えて両チームとも得点がなく、史上初の決勝戦タイプリーグが行われ、京都国際が勝利。初優勝を決めて甲子園球場に韓国語の校歌が流れた。何か新しい時代の到来を感じさせる夏の幕切れであった。

新基準のいわゆる低反発バットに変わったこの年の全国高校野球選手権大会（以下、甲子園大会）では、ロースコアの試合が多かった。特に準決勝と決勝戦は、1点を巡るヒリヒリするような攻防が繰り返された。これは筆者が子供のころみていた、甲子園大会を思い出させるものでもあった。

筆者が初めて甲子園球場で高校野球をみたのは、1971年8月15日、第53回大会の甲子園大会の準決勝、桐蔭学園・岡山東商（県立）、磐城（県立）・郡山（県立）の試合だった。準決勝、日曜日、お盆といった要素が重なったこの日は、内野席は早々に札止め。規制が緩かったこともあり、無料開放されていた外野席は通路まで観客で埋まり、スタンドは膨れ上が

っていた。当時筆者は小学生だったが、見たこともないような大観衆の熱気、グラウンドで繰り広げられる熱い戦い、それに今日に比べれば多少武骨かもしれないが、華やかな応援合戦。ここから高校野球の魅力に取りつかれ、以来高校野球をみ続け、現在は東京を中心として高校野球の取材をしている。

第53回大会は桐蔭学園が優勝。その前年の東海大相模に続き、神奈川の当時としては新興戦力が全国制覇を果たした。けれども翌年の第54回大会は、優勝は津久見（県立）、準優勝は柳井（県立）、第55回大会は、優勝は広島商（県立）、準優勝は静岡（県立）、第56回大会は、優勝は銚子商（県立）、準優勝は防府商（県立）、第57回大会は、優勝は習志野（市立）、準優勝は新居浜商（県立）と、公立校が優勝、準優勝を占めた。もちろん当時もPL学園をはじめ、中京（現中京大中京）、東邦、平安（現龍谷大平安）、天理、報徳学園、広陵など、私立の強豪校は多かった。けれども、公立校が互角以上の結果を残していた。しかし2000年以降、公立校で優勝したのは、07年夏、第89回大会の佐賀北（県立）のみ。準優勝も18年夏の第100回大会の金足農（県立）だけで、公立校はなかなか勝てなくなっている。

こうした変化はなぜ起きたか。そして私立優勢の時代は、いつから、どのような形で始まったのか。25年で107回の歴史を数える夏の甲子園大会を2つの時代に分けるとすれば、木製バットの時代だった73年の第55回大会までと、金属バットの使用が認められた74年の第

56回大会以降になる。大きな変化の波も、金属バットの使用が認められた74年以降に訪れる。金属バット導入から約50年。勢力図の変化を軸に、半世紀の歴史を辿っていく。

はじめに 〔第106回の夏〕 3

第1章 金属バット時代の始まり 〔申し子・原辰徳の登場〕

13

1974年の改革 14

銚子商の篠塚利夫と東海大相模の原辰徳 16

2年連続で公立校に敗れて終わった原辰徳の夏 19

部員14人のうち7人が県外出身者だった島根の江の川 22

桜美林の全国制覇と多摩地域の野球熱 23

第2章

49代表時代の幕開け 〔箕島、池田の全盛期〕

27

逆転のPL 28

未勝利県・滋賀の躍進 29

主力選手の大半が県外出身のチームの衝撃 31

箕島・池田の頂上対決 34

荒木大輔とリトルリーグ 36

高知・明徳の登場 39

やまびこ打線、高校野球を変えた夏 42

第3章

PL学園黄金時代

ライバルとなった公立校 47

PL学園新時代 48

KKコンビのPL学園VS公立校 10番勝負 50

公立王国埼玉に出現した浦和学院 69

盤石のPL学園と常総学院の台頭 71

第4章

団塊ジュニアの時代

～古豪復活の一方で新勢力も続々登場

77

四国の勢力図の変化 78

昭和最後の大会を制した広島商 79

帝京初の全国制覇 82

創部4年で全国制覇の大阪桐蔭とPL学園 85

沖縄水産の健闘とエース酷使の波紋 88

九州勢の躍進 92

日大三OBが開花させた拓大紅陵、二松学舎大付、関東第一 96

智弁和歌山の台頭 100

第5章

新世紀を前に

～強豪私立の時代へ

105

公立校が輝いた夏

106

分校初の甲子園 109

私立伝統校の苦悩 111

PL学園・中村監督の勇退 116

松坂大輔の甲子園 118

群馬県勢初の全国制覇 123

青森の新勢力 125

第6章

21世紀の甲子園

大阪桐蔭時代の一方で

129

21世紀枠導入 130

東北と仙台育英 132

旧女子校の台頭 139

北海道に渡った深紅の大優勝旗 143

名門早実、初の夏制覇 146

普通の公立校が起こした奇跡 150

大阪桐蔭時代の到来とPL学園時代の終焉？ 154

花巻東の登場 157

伝統校の相次ぐ復活優勝 160

沖縄・興南の春夏制覇 165

第7章 高校野球100年 ～歴史の扉が開いた

タイブレークの導入 172

投球制限導入とコロナ禍 176

優勝旗、白河の関を越える 181

慶応、107年ぶりの優勝 185

低反発バットの導入と旧外国人学校の全国制覇 188

終章

高校野球のこれからを考える 193

日本野球の草の根を支える高校野球 194
変わりゆく高校野球と変えてはいけぬ価値観 197

巻末データ

全国高校野球 歴代優勝校

1974 - 2024

203

参考文献
216

図版：ジェオ 写真：日刊スポーツ／アフロ

第

章

金属バットの 時代の 始まり

（申し子・原辰徳の登場



1975年夏「アサヒグラフ」9/5号

1974年の改革

前年に始まるオイルショックにより、高度経済成長に終わりを告げようとしていた1974年、高度経済成長と歩みをともしして連続優勝を重ねていた巨人は、中日にセ・リーグ王者の座を譲り、連続優勝は9で止まった。同時に戦後のプロ野球最高のスターであった長嶋茂雄が、「我が巨人軍は永久に不滅です」という言葉を残し、現役を引退した。プロ野球の一時代が終わろうとしていたこの年、高校野球でも、2つの大きな変化があった。

一つ目は金属バットの使用を認めたことだ。きっかけは、73年6月、ハワイ選抜チームが来日。日本各地を転戦し、その年のセンバツベスト8の日大一などと9試合を行ったことだった。その際、アルミ製の金属製バットの使用を打診してきた。70年代に入り、アメリカでは高校・大学で金属バットを使用するようになっていた。日本側も研究の意味もあり使用を認めたことが、日本の高校野球と金属バットの出合いである。

そこから金属バットの導入を巡る議論が始まった。時期尚早という意見もあったが、木製バットは折れやすいうえに、原材料不足から値上げが予想され、部活動としての経費がかさむ。当時絶対的な権力を持っていた日本高校野球連盟の佐伯達夫会長が導入に前向きだったこともあり、74年3月に金属バットの導入が決まった。1年目はアメリカ製2社のバットのみが認められた。

もう一つの大きな変化は、夏の甲子園大会の出場校数の増加である。夏の甲子園大会の出場校数は、60年の第42回大会から72年の第54回大会まで30校であった。第40回、45回、50回、55回の記念大会だけは、一都府県一代表が認められ、北海道は59年の第41回大会から南北二代表が認められていた。しかしそれ以外の大会では、単独で出場できた都府県は、東京、神奈川、長野、静岡、愛知、大阪、兵庫、広島、福岡、鹿児島だけで、ほかは近隣の府県と、代表決定戦を戦わなければならなかった。松山商（県立）などがある愛媛と高松商（県立）、坂出商（県立）などがある香川が戦う北四国大会は、野球が盛んな土地柄だけに、し烈な戦いになった。その一方で、全国レベルの強豪であった平安（現龍谷大平安）などがある京都と京滋大会を戦わなければならなかった滋賀のように、夏の甲子園大会にはほとんど出場できなかった県もあった。それが78年の第60回大会からは一府県一代表が認められるようになった。74年の第56回大会から、出場校数を少しずつ増加させることになり、まず第56回大会は34校になった。東京は東西二代表になったほか、岩手、福島、茨城、千葉、新潟、京都は単独出場できるようになり、地区大会の一部組み換えも行われた。

71年から74年までは年間出生数が200万人を超える、いわゆる第2次ベビーブームの時代を迎える。終戦直後の第1次ベビーブーム、いわゆる団塊の世代の子供たちが学齢期を迎える80年代から90年代の初めにかけては、学校経営にとってはゴールデンタイムである。甲

子園大会の出場校数が拡大した時期と、第2次ベビーブームの時期が重なったことは、高校野球の勢力図にも大きな影響を及ぼすことになる。

銚子商の篠塚利夫と東海大相模の原辰徳

74年夏の第56回の甲子園大会は、34校が出場して行われた。この大会は初出場校が13校というフレッシュな大会になった。イチローの母校として知られる愛工大名電も、この大会、名古屋電工として初出場を果たしている。

74年の選抜高校野球大会（以下、センバツ）では金属バットの使用は認められず、センバツ後の春季大会から使用が可能になった。ただほとんどの学校が使用し始めたのは6月ごろからで、高校野球ファンの前に金属バットが現れたのは、夏の地方大会からであった。

まだ木製バットの感触に慣れていない選手が多かった。そのうえ、次第に美津濃（ミズノ）など国内メーカーのバットの使用も認められるようになるが、1年目は実績のあるアメリカ製バットだけだった。アメリカ製のバットは日本の高校生には重いなどの理由から、木製バットを使う選手もかなりいた。74年の夏の甲子園大会で金属バットを使用した選手は全体の5分の3程度であった。この大会の本塁打は11本。そのうち8本が金属バットを使用した打者が打った。金属バットの効果が大きかったことは確かだ。

木製バットで打った3本の本塁打のうち2本は銚子商（県立）の篠塚利夫（現在は和典）が打ったものだった。この夏の銚子商は、前評判通りの強さを発揮して初優勝を果たした。斉藤一之監督率いる銚子商は、前年の夏の甲子園大会で「怪物」と呼ばれた作新学院の江川卓に投げ勝った土屋正勝に加え、「黒潮打線」と呼ばれた強力打線を有していた。篠塚は2年生ながら、4番・三塁手として黒潮打線の中核を担った。ただ4番といっても豪快さでなく、「玄人受けする」といわれた、打撃の柔らかさが光っていた。

ほとんどのチームが何人かは木製バットを使用する選手がいる中で、唯一全選手が金属バットを使用していたのが、原貢監督が率いる東海大相模だった。巨人の選手、監督として活躍する原辰徳の父親である原貢は、福岡県大牟田市のノンプロ・東洋高圧の野球部に所属しながら、野球部長に頼まれ、三池工（県立）の監督も務めた。そして65年の夏、第47回の甲子園大会で、斉藤一之監督率いる銚子商を決勝戦で破り全国制覇を果たす。不況の炭鉱の町に灯りをともした優勝だったが、この時、原辰徳は小学1年生であった。

その翌年の12月、東海大の総長であった松前重義から声がかかり、63年に開校したばかりの東海大相模の監督に就任した。原貢監督は東海大相模でも70年夏、第52回の甲子園大会で優勝している。この優勝は、高校野球で監督の重要さを認識させるきっかけにもなった。そしてこの時の決勝戦は10－6という、木製バット時代では異例のハイスコアの試合であった。

しかも東海大相模は、大会を通じてスクイズを一度も行わない攻撃的な野球を貫いた。

そういう攻撃的チームだけに金属バットの導入が決まると、いち早く取り入れた。しかも当時は、金属バットでも短く持つのが一般的であったが、東海大相模の選手は、グリップエンドギリギリまで、長く持っていた。そんな攻撃的なチームで原辰徳は、1年生ながら5番、三塁手で出場していた。この大会で原辰徳は、17打数7安打、三塁打と二塁打が各1本という成績を残した。本格的に注目を集めるのは2年生になってからだが、1年生で大器の片鱗はみせており、金属バット時代の到来とともに出現した打者のスターであった。

この年投手では、銚子商の土屋のほか、前年のセンバツの優勝投手である横浜の永川英植、土浦日大を春夏ともに甲子園に導いた工藤一彦の評判が高く、「関東三羽ガラス」などと呼ばれていた。東海大相模は、神奈川大会の決勝戦で、横浜の永川を打ち崩し、甲子園大会の初戦（2回戦）で工藤投手擁する土浦日大に9回二死から同点に追いつき、延長16回の熱戦の末、勝利した。準々決勝では、2回戦、3回戦を完封で勝ち上がった定岡正二投手擁する鹿児島実と対戦。延長15回の球史に残る名勝負を繰り広げて敗れた。

準々決勝の第4試合であったこの試合は、NHKが試合の途中で定期放送のため、高校野球の中継を打ち切った。そのため、抗議の電話がNHKに殺到。翌年の夏の甲子園大会から、総合テレビと教育テレビ（Eテレ）をリレーして、ほぼ完全中継を行うようになった。

また原辰徳を破った鹿児島実の定岡は、その年のドラフト会議で巨人に1位指名された。銚子商の篠塚は、翌年の夏の千葉大会の準決勝で、その年に全国制覇をすることになる習志野（市立）に1-2で敗れたが、ドラフト1位で巨人に入団する。原辰徳は東海大を経て、80年のドラフトで巨人に1位指名された。入団1年目の81年、巨人の三塁手には中畑清がいたため、原辰徳は二塁手でデビューした。その影響により二塁手で出場していた篠塚は、出場機会が減ったが、5月に中畑が負傷したことで、原辰徳が三塁に入り、二塁手の篠塚、復帰して一塁手になった中畑らと巨人の一時代を築くことになる。

2年連続で公立校に敗れて終わった原辰徳の夏

金属バットの威力を、本当の意味で実感するようになったのは、75年の第47回のセンバツ大会であった。かつては、「春は投手力」と言われていたが、開幕戦で優勝候補の倉敷工（県立）と中京（現中京大中京）が対戦し、16-15、本塁打が3本も飛び出す超乱打戦で倉敷工が勝ち、固定観念は覆った。

東海大相模の原は、この大会で最も注目された選手であったが、それほど目立った活躍はしていなかった。しかし当時の東海大相模のパワーは別格だった。2回戦の倉敷工、準々決勝の豊見城（県立）戦は苦戦したものの、決勝戦に進出した。高知との決勝戦で1回裏、原

は左中間スタンドに飛び込む本塁打を放った。当時の高校野球では見たこともないような特大の一発で、原の評価は一気に高まった。ただしチームは延長13回の激闘の末5-10で敗れ、優勝はならなかった。

この年の第57回の夏の甲子園大会では、原は2年生ながら女性ファンに人気のアイドルであり、最強の打者として、注目を一身に集めた。準々決勝に進出した東海大相模の前に立ちはだかったのは、上尾（県立）であった。上尾の野本喜一郎監督は、プロ野球の西鉄（現西武）にも在籍し、東洋大の監督も務めたベテランの指導者だった。夏は前年の第56回大会に西関東（埼玉と山梨）代表として初出場を果たし、大会出場校が34校から38校に増加したことにともない、単独枠になった埼玉代表として2年連続出場を果たしていた。

東海大相模は原の三塁打、二塁打を含め4打数4安打の活躍もあり、7回が終わった段階で、4-2とリードした。しかし上尾は8回表の猛攻で3点を挙げて逆転する。その裏、二死一塁の場面で原に打席が回る。上尾の今太投手はカーブなど変化球主体で球威はそれほどないが、気持ちの入った投球をする。そして原は捕邪飛に終わり、2年生の夏の戦いは、終わった。その夏の決勝戦は、習志野が初出場である愛媛の新居浜商（県立）を5-4、9回サヨナラ勝ちで破り、8年ぶり2度目の優勝をした。

この年の秋季神奈川県大会の準々決勝で東海大相模は横浜に敗れ、翌年のセンバツ出場は

ならなかった。その年のセンバツは、広島の崇徳が栃木の小山（県立）を5-0で破り、初優勝している。

高校最後の夏、原は甲子園に戻ってきた。第58回大会の開幕戦に登場し、東海大相模は4番打者で、原とともに強打者として評判であった津末英明が2本の本塁打を放ち、釧路江南（道立）に5-0で勝利した。そして2回戦は栃木の小山と対戦した。

小山はその年のセンバツの準優勝校だが、立役者の1人であるエースの初見幸洋は故障明けで本調子ではなかった。背番号8で主将の黒田光弘は、センバツでも投げてはいたが、背番号通り、本来は外野手。けれども東海大相模戦に先発すると、スローボールを交える緩急自在の投球で強力打線を手玉に取り、打たれた安打はわずかに3本で完封。後に東海大相模や東海大甲府の監督として名をはせるエースの村中秀人のワイルドピッチが決勝点になり、0-1で東海大相模は敗れ、原の夏は終わった。

原が甲子園で活躍した3年間、優勝は銚子商、習志野、桜美林といずれも関東勢で、神奈川の東海大相模は、原が1年生の夏は鹿児島実に敗れたが、2年生の夏は埼玉の上尾、3年生の夏は栃木の小山に敗れた。公立、私立を問わず、この時代の高校野球の主役は、関東勢であった。

部員14人のうち7人が県外出身者だった島根の江の川

75年の第57回の夏の甲子園大会は、出場校が前回より4校増えて、38校になった。そのうち、初出場は12校だった。準優勝の新居浜商や栃木の足利学園（現白鷗大足利）が初出場を果たしているが、初出場校で変わり種として注目されたのが、山陰代表、島根の江の川（現石見智翠館）だった。当時の甲子園大会のベンチ入りは14人だったが、江の川の部員は14人。しかもそのうち半分の7人が県外の出身者だった。この学校は、もとは女子校だったが、63年に男女共学になり、66年に野球部を創部、野球部の強化に取り組んだ。野球部創部当時の理事長が、兵庫の強豪・三田学園の野球部関係者と知り合いだったことから、両校は姉妹校になり、三田学園の人脈を通じて京阪神の中学生をスカウトした。

三田学園はセンバツに4回出場している強豪校。近鉄などで活躍した伊勢孝夫、巨人でプレーした山本功児、淡口憲治など多くのプロ野球選手を輩出している。その三田学園の協力を得て、京阪神から人材を集めた。当時大阪のPL学園のように、全国から生徒を集めている学校もあったが、こうした学校はまだ少なかった。やがて少年野球が盛んな関西の少年が全国各地の高校に進学して、その地域の高校野球の勢力図を変えるようになる。江の川は、その先駆けともいえる。

この大会で江の川は、初戦（2回戦）で福滋代表である福井の三国（県立）に0-6で敗れ

る。3年生が抜けると2年生以下の部員は5人となり、部の存続も危ぶまれた。けれども、その後も島根県を代表する強豪校となる。88年の夏は横浜（現横浜DeNA）、中日の捕手として活躍した谷繁元信を擁し準々決勝に進出。2003年の夏は準決勝に進出したが、ベンチ入りのメンバー全員が大阪府など、島根県外の出身であった。

桜美林の全国制覇と多摩地域の野球熱

76年夏の第58回の甲子園大会は41校が出場し、西東京代表の町田市の桜美林が初出場優勝した。東京勢が夏の大会で全国制覇を果たすのは、第2回大会の慶応普通部以来60年ぶりの快挙になる。慶応普通部は戦後、慶応高校として神奈川県を拠点としたため、東京は夏の甲子園大会の優勝校が不在の状況であった。桜美林の優勝により、東京にも優勝校が再度誕生したことになる。

東京の野球は、墨田区にある日大一が68年夏の第50回大会から71年夏の第53回大会まで4年連続で甲子園大会出場を果たし、72年夏の第54回大会に世田谷区の日大桜丘を挟んで、第55回大会は日大一が出場。当時は新宿区にあった早稲田実にしても、王貞治が墨田区出身であることから分かるように、人材は東部の下町が中心になっていた。第56回大会から東西2代表になったが、第56回大会の西東京代表は杉並区の佼成学園で、第57回大会は中野区の堀

越といったように、区部のチームが甲子園に行っていた。桜美林以前に東京西部・多摩地域の市町村で夏の甲子園大会に出場したのは、61年夏の第43回大会に出場した法政一（現法政大高）だけである。その法政一にしても、当時は武蔵野市の吉祥寺に校舎があった。吉祥寺は生活者の感覚としては杉並区、練馬区に近く、市部という感じはあまりない。その意味で桜美林は多摩地域から実質的に初めて甲子園大会に出場したことになる。第58回大会の「週刊朝日・増刊」の甲子園大会号は桜美林について、「東京のローカルチーム」と紹介している。

高度成長期に東京は、多くの人が流入してきた。そうした人たちの多くにとって、「地元の高校野球」というのは、出身地の高校野球であり、東京ではなかった。60年代後半から70年代にかけて、多摩地域の丘陵地帯に多摩ニュータウンをはじめとする大規模団地が造成される。こうした団地には野球ができるグラウンドや広場を有するところも多く、少年野球が盛んに行われた。こうした団地の野球少年たちにとって、優勝した桜美林は身近なヒーローであり、桜美林の優勝は東京の高校野球が盛り上がる契機になった。

桜美林が優勝した76年に日大三が赤坂から町田市に移転した。それまで日大三の野球部員は授業が終わると赤坂見附駅にダッシュして、グラウンドのある調布市柴崎に行かなければならなかった。町田市移転に伴い、校舎のある学校の敷地内に専用グラウンド、室内練習場、合宿所が揃い、練習環境は格段に整備された。

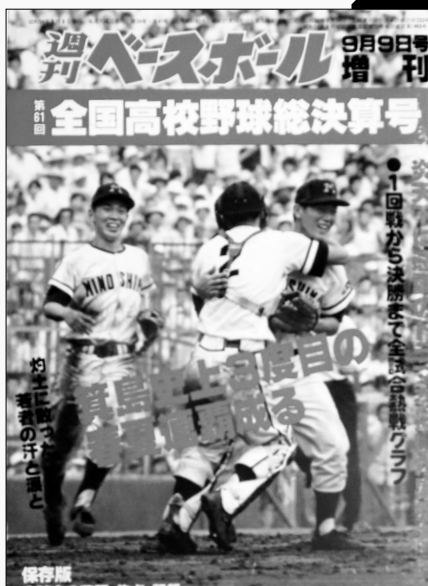
70年代から80年代にかけて、多摩地域には新たな学校が次々に生まれ、学業やスポーツで結果を残すようになる。団塊ジュニアの就学期に加え、大規模団地の子供の受け皿が必要であった。加えて、広い土地を求めて、中央大学をはじめとする大学や、企業の研究所が多摩地域に移転するようになる。大学の教職員など、子供の教育に熱心な層の増加により、多摩地域の高校の偏差値は上昇する。この地域の学校は、都心の学校に比べ練習環境も恵まれているので、スポーツでも台頭してくる。

83年に創立した東京菅生（現東海大菅生）は、87年には西東京大会で準優勝している。学校創立が68年で、72年に野球部が創部した小平市の創価は、83年の夏に甲子園大会初出場を果たした。こうした新しい学校の台頭に加え、従来からある学校の活動も活発になり、多摩地域の野球熱は高まっていった。

箕島、池田の全盛期

幕時49 開代代 けの表

第



章

逆転のPL

74年夏の第56回大会から76年夏の第58回大会まで、銚子商（県立）、習志野（市立）、桜美林と関東勢の優勝が続いたが、77年の第59回大会は、決勝戦で安井浩二のサヨナラ本塁打により東洋大姫路が愛知の東邦を破り初優勝を決めた。決勝戦のサヨナラ本塁打は大会史上初の出来事だった。この大会、東邦の1年生のエース・坂本佳一が人気を集めたが、東洋大姫路の安井の一発に沈んだ。

そして78年の第60回大会から北海道と東京は2代表で、各府県1代表の49代表の時代が始まった。それに伴い、ベンチ入りできる選手の数が増えた。従来の14人から15人に1人増えた。

第60回大会を制したのは、大阪のPL学園だった。PL学園は、70年の第52回大会、76年の第58回大会で準優勝し、既に全国に知れ渡った強豪であったが、全国制覇は春夏を通じて初めてだった。しかもその勝ち方が、劇的だった。

準々決勝は県岐阜商の下手投げの好投手・野村隆司に5安打に抑えられたが、後に広島の外野手として活躍するエース・西田真次（後に真二）の好投により1-0で勝ち、準決勝に進んだ。準決勝の相手は中京（現中京大中京）。試合は9回表までは4-0で中京がリードしていたが、9回裏PL学園は、4番打者でもある西田の三塁打をきっかけに猛攻が始まり、4点を入れて同点に追いついた。そして延長12回、押し出しでサヨナラ勝ちした。

決勝戦は、高知商（市立）の2年生エース・森浩二に8回までわずか3安打に抑えられ、9回表まで2-0で高知商がリードしていた。9回裏一死二、三塁から後に阪神の捕手として活躍する木戸克彦の中犠飛で1点差に迫るも二死。しかし4番・西田が二塁打を放って同点に追いつく。最後は5番・柳川明弘の二塁打で西田が還り、PL学園が土壇場で逆転勝ちした。準決勝、決勝の劇的な勝利から、「逆転のPL」と呼ばれるようになった。

監督は鶴岡泰（後に山本泰）。監督として日本プロ野球史上最多の1773勝を挙げ、南海（現ソフトバンク）の黄金時代を築いた鶴岡一人の息子である。練習は1日6時間。少しでもミスをするとうサギ飛びでグラウンド一周を課すという、厳しいものだった。

PL学園は、PL教団の御木徳近教祖が、「人生は芸術である」、「球道即人道」と説き、力を入れていた。専用球場に合宿所といった施設が充実し、全国から人材が集まっていた。また華やかな人文字応援も甲子園の名物になっていた。黄金期はもう少し先になるが、人気、実力ともこの時代の高校野球を代表するチームであった。

未勝利県・滋賀の躍進

全国大会であれ、国際大会であれ、出場チームが増えれば、出場チーム間の力の差が広がり、大会の質が低下する懸念が生じる。78年の第60回大会の段階で、夏の甲子園大会で一度

も勝ったことがない、唯一の都道府県が滋賀であった。

72年の第54回大会までは京都と京滋大会を戦わなければならなかった。京都には平安（現龍谷大平安）という全国レベルの強豪がおり、滋賀県勢の前に立ちはだかった。それでも71年夏の第53回大会は比叡山、翌第54回大会は膳所（ゼ 県立）が京滋大会を勝ち抜き、甲子園大会に駒を進めていた。しかし各都道府県から代表校が出場できる第55回大会を挟み、第56回大会から第59回大会までは、京都が単独の出場枠を得た代わりに、滋賀県勢は福井県勢と福滋大会を戦わなければならなかった。福滋大会で滋賀県勢は4年間、一度も勝つことができなかった。

78年夏の第60回大会からは滋賀県勢も毎年出場できるようになったが、この年のセンバツ大会で比叡山が前橋（ゼ 県立）の松本稔投手に春夏の甲子園大会を通じて史上初の完全試合を達成させられた。夏の大会では膳所が、同じ群馬の桐生（ゼ 県立）と対戦。0-18という大惨敗を喫し、「湖国の春は遠い」と言われた。

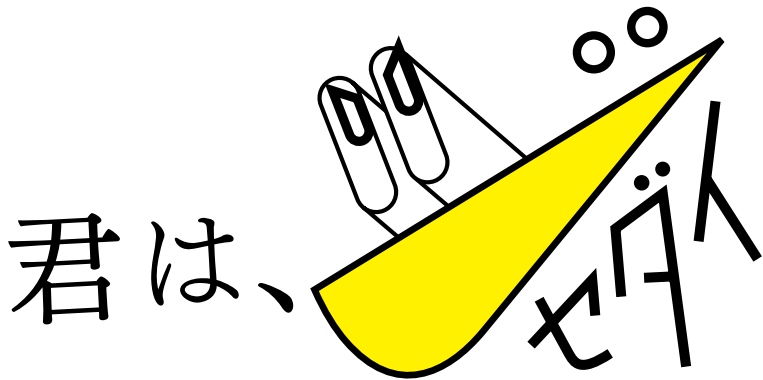
しかし翌年夏の第61回の甲子園大会では、比叡山が釧路工（道立）を12-4で破り、滋賀県勢悲願の夏の甲子園大会初勝利を挙げると、2回戦で三重の相可（おつか 県立）、3回戦で前橋工（ゼ 県立）を破り、準々決勝に進出した。準々決勝では「ドカベン」の愛称で親しまれた強打者・香川伸行を擁する浪商（現大体大浪商）に0-10で敗れたものの、滋賀県勢の存在感を示

した。この時の比叡山の中心選手は捕手で主将の相伴嘉彦、二塁手の堀雅人ら前年のセンバツで完全試合の屈辱を味わった選手であり、その悔しさが、翌年の快進撃の原動力になった。続く第62回大会では瀬田工（県立）が準決勝に進出。未勝利県だった過去の汚名を完全に払拭した。各都道府県から漏れなく代表校を甲子園大会に送ることができるようになり、全国的なレベルアップが進んだことは間違いない。けれども49代表時代は、また別の問題を生み出していた。

主力選手の大半が県外出身のチームの衝撃

78年の第60回大会の時点で、大阪大会の参加校は138校、兵庫大会は135校なのに対し、鳥取大会は18校、高知大会は21校と、地方大会の参加校数に明らかな差が生じていた。大阪や兵庫は参加校数が多いうえに、強豪校が多くレベルが高い。少年野球が盛んな大阪や兵庫の中学生が、他の地方の高校を目指すというのも、自然な流れではあった。そして80年夏の第62回の甲子園大会では、開校3年目で甲子園出場を決めた茨城代表の江戸川学園と鳥取代表の倉吉北のメンバーの多くが県外出身であり、「外人部隊」として問題にもなった。

その前年に地方大会号として発行された「週刊朝日・臨時増刊」には、「激論を呼びつつも拡大される『野球留学』』という見出しで、倉吉北の事例が報道されている。記事によれば、



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!